

シン・ジャパニーズ・ペインティング 革新の日本画

—横山大観、杉山寧から現代の作家まで

作家解説 ※五十音順

展示室 1

■浅井 忠 1856年(安政3)、東京 — 1907年(明治40)、京都
Chu Asai 1856, Tokyo — 1907, Kyoto

1876年(明治9)に工部美術学校に入学し、イタリア人画学教師アントニオ・フォンタネージの教えのもとでバルビゾン派風の絵画を学び、詩情豊かな風景画を描く。1900年(明治33)に渡仏、アール・ヌーヴォー様式に触れ、工芸品の図案なども手がけた。晩年は京都高等工芸学校で教鞭をとるとともに、関西美術院を開設、次代の洋画家を数多く育てた。

■今井俊満 1928年(昭和3)、京都 — 2002年(平成14)、東京
Toshimitsu Imai 1928, Kyoto — 2002, Tokyo

1952年(昭和27)に渡仏しパリで活動。1950年代、フランスの批評家ミシェル・タピエが唱えた抽象絵画運動アンフォルメルに参加し日本に紹介。1960年代にはヴェネツィアやサンパウロのビエンナーレなどに出品。1980年代には日本の伝統に回帰した「花鳥風月」シリーズ、1990年代には戦争や原爆をテーマとした「ヒロシマ」シリーズなどを手掛け、晩年には現代女性を描く「コギャル」シリーズを発表。

■入江波光 1887年(明治20)、京都 — 1948年(昭和23)、京都
Hako Irie 1887, Kyoto — 1948, Kyoto

幼少期に四条派の森本東閣に師事。京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校卒業。1918年(大正7)、母校の絵画専門学校助教授に就任。1922年(大正11)に渡欧。国画創作協会運動に参画したが1928年(昭和3)の同会日本画部解散後は画壇を離れ、後進の育成と制作に打ち込む。また、古画の模写を続け、1940年(昭和15)より文部省の依頼で法隆寺金堂壁画の模写を行った。

■岡倉秋水 1867年(慶応3)、福井 — 1950年(昭和25)、東京
Shusui Okakura 1869, Fukui — 1950, Tokyo

美術評論家・思想家の岡倉天心の甥。最初、東京外国語学校でフランス語を学ぶが画家を志し、1880年(明治13)頃より狩野芳崖に師事し、狩野派を学ぶ。その後、アーネスト・フェノロサに美学を学び、鑑画会に出品。1889年(明治22)に東京美術学校に入学するも翌年退学し、東京女子高等師範で教える。のち学習院教授を務めた。この間に小林呉嶠らと日月会を結成した。

■岡田三郎助 1869年(明治2)、佐賀 — 1939年(昭和14)、東京
Saburosuke Okada 1869, Saga — 1939, Tokyo

黒田清輝と久米桂一郎が創設した天真道場に学ぶ。1896年(明治29)、白馬会結成に参加するとともに、新設された東京美術学校西洋画科の助教授に任命される。翌年、文部省留学生として渡仏、黒田の師ラファエル・コランの指導を受け、繊細かつ典雅な作風を身につけた。独自の装飾性と官能性を秘めた甘美な婦人像を数多く制作している。1937年(昭和12)、第1回文化勲章受章。

■小野竹喬 1889年(明治22)、岡山 — 1979年(昭和54)、京都
Chikkyo Ono 1889, Okayama — 1979, Kyoto

竹内栖鳳に師事、京都市立絵画専門学校に学ぶ。1907年(明治40)の第1回文展入選以来、出品を続けたが、1918年(大正7)に国画創作協会結成に参加し文展から離れる。1921年(大正10)から翌年まで渡欧。1928年(昭和3)の同会日本画部解散後は官展に復帰し、新文展、日展で活躍。西洋絵画の影響を受けつつ南画にも関心を示し、新たな日本画を模索。1976年(昭和51)、文化勲章受章。

■狩野芳崖 1828年(文政11)、山口 — 1888年(明治21)、東京
Hogai Kano 1828, Yamaguchi — 1888, Tokyo

狩野派の絵師の父に手ほどきを受けた後、1846年(弘化3)に江戸に出て狩野派の勝川院雅信に入門。長く困窮生活を続けたが、アーネスト・フェノロサに認められて1885年(明治18)、第1回鑑画会に出品。狩野派の伝統を守りながらも、フェノロサ、岡倉天心らとともに新しい日本画の創造に取り組む。東京美術学校創立にも尽力したが、開校を目前にして病没した。

■加山又造 1927年(昭和2)、京都 — 2004年(平成16)、東京
Matazo Kayama 1927, Kyoto — 2004, Tokyo

西陣織の図案家の子として生まれる。1944年(昭和19)に京都市立美術工芸学校日本画科を卒業後、東京美術学校日本画科に入学。同校卒業後は山本丘人に師事し、新制作協会日本画部、創画会で活動を続けた。金箔を多用した琳派風の絢爛豪華な屏風から、情趣豊かな水墨画や着物の意匠にいたるまで、幅広い表現領域で装飾美を追究した。2003年(平成15)、文化勲章受章。

■川端玉章 1842年(天保13)、京都 — 1913年(大正2)、東京
Gyokusho Kawabata 1842, Kyoto — 1913, Tokyo

1852年(嘉永5)に中島来章に入門、円山派を学ぶ。1866年(慶応2)、江戸に出て苦学を重ね、一時はイギリス人画家チャールズ・ワグマンに洋画を学ぶ。岡倉天心に日本画を認められ、東京美術学校で円山派の写生画を教えた。西洋絵画の写実を採り入れ、晩年は文人画を研究。1909年(明治42)、川端画学校を開設し後進を育てた。古美術保護にも尽力、画壇の重鎮として幅広く活動した。

■川端龍子 1885年(明治18)、和歌山 — 1966年(昭和41)、東京

Ryushi Kawabata 1885, Wakayama — 1966, Tokyo

白馬会洋画研究所、太平洋画会研究所で洋画を学び、新聞社で挿絵を手掛ける。1913年(大正2)に渡米した際、日本画開拓の意義を自覚し帰国後日本画に転じた。再興日本美術院展で活躍したが、大胆な表現が異端視され、1928年(昭和3)に美術院を脱退。翌年、青龍社を創立、会場芸術を唱えて伝統的技法や奇抜な内容と豪放で動感に富む作風を打ち出した。1959年(昭和34)、文化勲章受章。

■川村清雄 1852年(嘉永5)、東京 — 1934年(昭和9)、奈良

Kiyoo Kawamura 1852, Tokyo — 1934, Nara

初め南画を学ぶ。1863年(文久3)より開成所で英語を、のち川上冬崖らに洋画を学ぶ。徳川家留学生として1871年(明治4)渡米、フランスを経てイタリアに行きヴェネツィアの美術学校で学び、1881年(明治14)帰国。画塾を開き後進を育てる一方、1889年(明治22)の明治美術会結成、1902年(明治35)の巴会結成に参画。日本的な主題を描き、文学書の挿絵も手掛けた。

■菊池契月 1879年(明治12)、長野 — 1955年(昭和30)、京都

Keigetsu Kikuchi 1879, Nagano — 1955, Kyoto

初め南画を学ぶ。1896年(明治29)に京都に出て内海吉堂に師事、のち四条派の菊池芳文に学び菊池家を継いだ。1907年(明治40)の第1回文展以来連続入賞し、1918年(大正7)に審査員となる。1922-1923年(大正11-12)に渡欧。帝室技芸員、帝国芸術院会員、京都市立絵画専門学校教授、同校校長などを歴任。大和絵の古典的画法を基礎に独自の画風を確立、優れた歴史画、人物画を残した。

■岸田劉生 1891年(明治24)、東京 — 1929年(昭和4)、山口

Ryusei Kishida 1891, Tokyo — 1929, Yamaguchi

白馬会洋画研究所に学ぶ。文芸雑誌『白樺』でポスト印象派の画家たちの作品を知り、あざやかな色彩と大胆な筆致による作品を描く。1915年(大正4)の草土社結成頃から北方ルネサンス風の緻密な表現に転じた。重厚な風景画や「麗子像」の細密描写は同時代の画家たちに影響を与えた。大正末期には宋元画や初期肉筆浮世絵に傾倒し、日本画や東洋的な要素を加えた油彩画を制作。

■小杉放菴(未醒) 1881年(明治14)、栃木 — 1964年(昭和39)、新潟

Hoan (Misei) Kosugi 1881, Tochigi — 1964, Niigata

五百城文哉に洋画を学ぶ。1899年(明治32)に上京、小山正太郎の画塾不同舎で写実表現を習得。1903年(明治36)より未醒と号する。1913年(大正2)に渡欧し日本画の研究を決意。帰国後、再興日本美術院洋画部同人となるが後に解散。1922年(大正11)、春陽会を結成。以後、日本画の制作が中心となり、1923年(大正12)頃に放庵(のち放菴)に改号。後半生は渴墨による文人画も手掛けた。

■小山正太郎 1857年(安政4)、新潟 — 1916年(大正5)、東京
Shotaro Koyama 1857, Niigata — 1916, Tokyo

1871年(明治4)に政治家を志して上京するが、同年、川上冬崖の洋画塾聴香読画館に入門、洋画修学の道に進む。1876年(明治9)、工部美術学校に入学し、イタリア人画学教師アントニオ・フォンタネージの教えを受ける。画塾不同舎を設けて後進を育成するとともに、東京師範学校の図画教師をつとめるなど、日本の美術教育の発展に尽力した。

■澤部清五郎 1884年(明治17)、京都 — 1964年(昭和39)、京都
Seigoro Sawabe 1884, Kyoto — 1964, Kyoto

鈴木瑞彦に日本画を学ぶ。守住勇魚に師事、のち浅井忠の門下となる。川島織物の二代川島甚兵衛に画才を認められ、織物関係の仕事に携わる。平等院天井画や金閣寺の壁画模写にも取り組み、古典美に開眼。1910年(明治43)から3年間、アメリカやフランスに滞在し西欧の装飾芸術への理解を深め、帰国後は関西美術院教授を務めるとともに、装飾織物の図案や原画を制作した。

■下村観山 1873年(明治6)、和歌山 — 1930年(昭和5)、東京
Kanzan Shimomura 1873, Wakayama — 1930, Tokyo

狩野芳崖、橋本雅邦に師事。岡倉天心に認められ、東京美術学校卒業と同時に助教授となるが、1898年(明治31)の騒動により辞職、日本美術院創設に参加。1903年(明治36)、文部省の命でイギリス留学。苦難の五浦時代を経て1914年(大正3)、横山大観らと日本美術院を再興し主導的役割を果たす。古典技法に精通し、卓越した技法で気品溢れる作品を制作した。

■杉山 寧 1909年(明治42)、東京 — 1993年(平成5)、東京
Yasushi Sugiyama 1909, Tokyo — 1993, Tokyo

東京美術学校在学中に帝展で特選を受ける。卒業後、同じ松岡映丘の門下生らと瑠爽画社を結成した。さらに日展への出品も続け、確かな絵画技法に裏付けられた作品を次々に発表し、画壇での地位を確立した。エジプト、ギリシア、トルコ、インドなどへの取材旅行を重ね、永遠性をテーマに晩年まで大作に挑み続けた。1974年(昭和49)、文化勲章受章。

■高橋由一 1828年(文政11)、東京 — 1894年(明治27)、東京
Yuichi Takahashi 1828, Tokyo — 1894, Tokyo

1866年(慶応2)、横浜でイギリス人画家チャールズ・ワーグマンに師事し、洋画を学ぶ。1876年(明治9)、工部美術学校のイタリア人画学教師アントニオ・フォンタネージから個人指導を受け、遠近法や明暗法をとり入れた風景画を描くようになる。1873年(明治6)に創設した画塾天絵楼では、後進を指導するとともに、そこで生徒と自らの作品を展覧し、洋画の普及につとめた。

■高山辰雄 1912年(明治45)、大分 — 2007年(平成19)、東京
Tatsuo Takayama 1912, Oita — 2007, Tokyo

東京美術学校で松岡映丘の指導を受け、卒業後は杉山寧らの瑠爽画社展に参加する。戦後、ゴーガンの伝記に触発されたことをきっかけに、その色彩と装飾的構成に影響を受ける。その後、宇宙を思わせる幻想的な色彩と人間への静かな洞察をそなえた画風を確立した。1982年(昭和57)、文化勲章受章。

■田村宗立 1846年(弘化3)、京都 — 1918年(大正7)、京都
Soryu Tamura 1846, Kyoto — 1918, Kyoto

初め京都で南画、次いで仏画を学ぶ。写真に啓発され、1865年(慶応5)頃には実物写生に写真機を活用し、独自の陰影表現による写実描写を生み出す。1872年(明治5)に粟田口病院のドイツ人医師ランゲックに油彩画を学んだ後、横浜でイギリス人画家チャールズ・ワーグマンの指導も受けた。1913年(大正2)の京都府画学校創立より教鞭をとる。晩年は日本画、仏画を描いた。

■堂本尚郎 1928年(昭和3)、京都 — 2013年(平成25)、東京
Hisao Domoto 1928, Kyoto — 2013, Tokyo

1945年(昭和20)、京都市立美術専門学校日本画科に入学。1955年(昭和30)よりパリへ留学、日本画から油彩画の制作へと転向した。フランスの批評家ミシェル・タピエと親交を結び、抽象絵画運動アンフォルメルに身を投じた。その後、日本独自の文化に表現をもとめ、矩形などの幾何学的な形象を連続して配する方法により、絵画、レリーフ、立体作品を制作。帰国後は、ポスターなどグラフィックの仕事においても活躍した。

■富田溪仙 1879年(明治12)、福岡 — 1936年(昭和11)、京都
Keisen Tomita 1879, Fukuoka — 1936, Kyoto

初め狩野派の手ほどきを受ける。1896年(明治29)、京都に出て都路華香に四条派を学ぶ。仙崖や富岡鉄斎に傾倒し、奈良・平安時代の仏画の研究を重ねる。文展、院展に出品。横山大観のすすめで1915年(大正4)に再興日本美術院の同人となる。文人画風の自由な表現と平安朝の仏画や大和絵の優雅で濃密な美感を総合させ、近代的感覚にあふれる画風を開拓した。

■橋本雅邦 1835年(天保5)、東京 — 1908年(明治41)、東京
Gaho Hashimoto 1835, Tokyo — 1908, Tokyo

1847年(弘化4)に狩野派の勝川院雅信に入門、1860年(万延元)に絵師として独立。維新の混乱で生活に困窮したが、1882年(明治15)の第1回内国絵画共進会で名を知られ、フェノロサ、岡倉天心の知遇を得て鑑画会に参加、日本画革新の運動を推進した。東京美術学校創立に尽力、開校より後進を指導した。美術学校を退いた後は日本美術院創設に参加し、主幹を務めた。

■東山魁夷 1908年(明治41)、神奈川 — 1999年(平成11)、東京
Kai Higashiyama 1908, Kanagawa — 1999, Tokyo

東京美術学校日本画科を卒業後、研究科に進学し結城素明に師事する。修了後、1933年(昭和8)から3年間ベルリン大学に留学、美術史を学ぶ。北欧やドイツの文学、音楽に親しみ、随筆等も多く執筆している。澄んだ色彩と静謐さをたたえた風景画を、日展を中心に発表した。1969年(昭和44)、文化勲章受章。晩年は唐招提寺御影堂の障壁画制作に力を注いだ。

■菱田春草 1874年(明治7)、長野 — 1911年(明治44)、東京
Shunso Hishida 1874, Nagano — 1911, Tokyo

東京美術学校で岡倉天心、橋本雅邦らに学ぶ。卒業後に講師となるが1898年(明治31)に辞任、日本美術院創設に参加し日本画の革新に努めた。描線を使わず色を暈して重ねる「朦朧体」の表現を追究した。1903年(明治36)から1905年(明治38)にインド、欧米を旅行、帰国後は天心らと五浦で制作に専念。写生と装飾が調和した、鋭い感性と知的表現により詩情が漂う作品を制作した。

■藤田嗣治(レオナルド・フジタ) 1886年(明治19)、東京 — 1968年(昭和43)、チューリヒ
Léonard Foujita (Tsuguharu Fujita) 1886, Tokyo — 1968, Zurich

東京美術学校西洋画科を卒業後、1913年(大正2)に渡仏し、パリでピカソやモディリアーニらと交流。乳白色の下地に日本の面相筆と墨を使って描く独特の様式と優美な裸婦の表現が絶賛され、パリ画壇で評価を確立。1930年以降は中南米や日本などを拠点とするが、1950年に再渡仏を果たし、フランス国籍を取得。晩年はキリスト教に改宗、子どもや宗教的場面を数多く描いた。

■松岡映丘 1881年(明治14)、兵庫 — 1938年(昭和13)、東京
Eikyū Matsuoka 1881, Hyogo — 1938, Tokyo

1889年(明治22)に上京し、初め橋本雅邦に狩野派、のち山名貫義に大和絵を学び、東京美術学校日本画科に入学。卒業後は同校で教鞭を執る。おもに文展、帝展に出品。1916年(大正5)に金鈴社、1921年(大正10)に新興大和絵会を創設、大和絵の再興による日本画の革新運動の先頭に立つ。1935年(昭和10)には国画院を設立、大和絵の近代化に尽くした。兄は民俗学者の柳田国男。

■三瀬夏之介 1973年、奈良 —
Natsunosuke Mise 1973, Nara —

京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻(日本画)修了。現在、東北芸術工科大学芸術学部美術科教授。岩絵具や和紙を画材として様々なイメージを取り込みながら、住む場所とその歴史や自身の記憶と不可分に結びついたテーマで作品を描き、「日本画」のあり方を問い続ける。地域名を冠した絵画の成立を探る「東北画は可能か？」プロジェクトを2009年に開始。

■山本丘人 1900年(明治33)、東京 — 1986年(昭和61)、神奈川

Kyujin Yamamoto 1900, Tokyo — 1986, Kanagawa

東京美術学校で松岡映丘に師事。1928年(昭和3)、帝展に初入選。1934年(昭和9)、映丘門下の杉山寧らと瑠爽画社を結成。その後は東京美術学校や女子美術専門学校で教鞭を執りながら、日本画の革新を目指し、創造美術、新制作協会日本画部、創画会などの結成にも関わり、豊かな詩情をたたえた風景画を発表した。1977年(昭和52)、文化勲章受章。

■横山大観 1868年(明治元)、茨城 — 1958年(昭和33)、東京

Taikan Yokoyama 1868, Ibaraki — 1958, Tokyo

1889年(明治22)に開校した東京美術学校に入学、橋本雅邦らに学び、岡倉天心の影響を受ける。1898年(明治31)、日本美術院創設に参加、菱田春草や下村観山らとともに美術院の主軸として活躍し、線ではなく色面による描法「朦朧体」による革新的な表現を試みる。あざやかな色彩による装飾的な画風を展開する一方、水墨画も手がけ、研ぎ澄まされた精神世界を画面に描きとどめた。1937年(昭和12)、第1回文化勲章受章。

シン・ジャパニーズ・ペインティング 革新の日本画

—横山大観、杉山寧から現代の作家まで

作家解説 ※五十音順

展示室 2, 3

■天野喜孝 1952年、静岡 —

Yoshitaka Amano 1952, Shizuoka —

15歳でタツノコプロに入社。「タイムボカン」シリーズなどタツノコプロ作品全般のキャラクターデザインを担当。1982年に独立、書籍のイラストレーションやゲーム「ファイナルファンタジー」シリーズのキャラクターデザインを手掛けた。1990年からはアーティストとしても活動を始め、世界各地のギャラリーで絵画を制作、展示。近年は、現代美術の領域でも精力的に作品を発表している。

■荒井経 1967年、栃木 —

Kei Arai 1967, Tochigi —

東京藝術大学大学院文化財保存学保存修復(日本画)修了。現在、同大学大学院美術研究科保存修復日本画研究室教授。日本画論、日本画技法材料史、文化財保存修復、東アジア各国との国際交流を通じた技法や素材に関する研究を行うかたわら、自然をモチーフとした作品を制作、国内外の展覧会で発表している。福島、沖縄などで文化財修復活動にも携わる。

■蔡國強 1957年、福建省(中国) —

Cai Guo-Qiang 1957, Fujian province, China —

上海劇場アカデミーで学んだ後、1986-1995年に日本で活動、火薬などを用いた実験的な試みを行い、作風を確立した。短時間しか現れない巨大なイメージを大空に描く花火や、和紙の上で火薬を爆発させ、その焦げ跡や煙で描く絵画、動物の剥製などを使った寓話的な大型のインスタレーションなどを制作。現在はニューヨークを拠点に、世界各地で個展やプロジェクトを手掛ける。

■杉本博司 1948年、東京 —

Hiroshi Sugimoto 1948, Tokyo —

立教大学卒業後、1970年に渡米しアート・センター・カレッジ・オブ・デザイン(L.A.)で写真を学び、1974年よりニューヨーク在住。大型カメラで撮影された精緻な写真作品を制作、国際的に高い評価を確立。歴史と存在の一過性をテーマとした多様な作品は、国内外の主要な美術館に収蔵されている。2008年に建築設計を手掛ける新素材研究所、2009年に公益財団法人小田原文化財団を設立、2017年には小田原に江之浦測候所を開設。

■春原直人 1996年、長野 ー
Naoto Sunohara 1996, Nagano ー

東北芸術工科大学大学院修士課程芸術文化専攻日本画領域修了。フィールドワークとして繰り返し登山をすることで自らの身体感覚で得た動きを作品に活かし、山の存在とそれを捉えるプロセスを大画面の抽象的風景として表現する作品で注目を集める。写生をもとに墨や岩絵具で山や岩のテクスチャーを描きながらも、登山の感覚と自身の思考を重ね合わせた内面的世界の表出を追究している。

■谷保玲奈 1986年、東京 ー
Reina Taniho 1986, Tokyo ー

多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画領域修了。幼少期をドミニカ共和国、ボリビアで過ごす。生命発生の始原や生命記憶の神秘に対する強い関心を制作の背景としながら、日常生活のなかで目にする花やキノコ、植物や動物などの生命体が渾然一体となった有機的なモチーフを、極彩色を用いた鮮やかな色彩により緻密かつ躍動感をもって描写する作品を制作。

■永沢碧衣 1994年、秋田 ー
Aoi Nagasawa 1994, Akita ー

秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻卒業。動物と人間のあいだにある境界線やそれらの関係性から生まれる環境、そして、埋もれそうな記憶の痕跡を残すため旅をしながら制作している。近年は狩猟免許を取得し、東北の山猟文化に深く関わりながら、人間と異種の間を問い、時空を超えた生と死の循環をダイナミックに表現した作品を描いている。

■野口哲哉 1980年、香川 ー
Tetsuya Noguchi 1980, Kagawa ー

広島市立大学大学院芸術学部油絵科修了。「鎧と人間」をテーマに、合成樹脂や化学繊維、アクリルなどを素材として、鎧兜に多様な文化を反映させた彫刻や平面作品を制作。固定観念にとらわれず、過去や現在の時代や文化が複雑に交雑する世界観を構築している。普遍的な人間本来の姿の表現を追究した作品は、人の持つ不安定さと前向きさが同居している。

■長谷川幾与 1984年、東京 ー
Kiyoko Hasegawa 1984, Tokyo ー

多摩美術大学大学院美術研究科博士前期課程日本画研究領域修了。現代の書を思わせるような、大胆な筆致による抽象的な表現と鮮やかな色彩によって、自らの心象の風景を描く。日本独特の湿潤な空気感を強く意識し、自然と対話しながら日本古来の風景感覚を辿り、その崇高性や神秘性を絵画に昇華している。近年は、ライブ制作などのパフォーマンスも行っている。

■半澤友美 1988年、栃木 —
Tomomi Hanzawa 1988, Tochigi —

女子美術大学芸術学部立体アート学科卒業。2018年度、ポーラ美術振興財団在外研修員としてアメリカ、メキシコ、カナダにて研修。手漉き紙や、紙の原料である植物繊維を絡ませて成形した立体作品やインスタレーションを制作。紙の特性や、土地によって異なる紙の在り方や成り立ちなどから、自己や人間を取り巻く環境や構造、その背景について考察している。

■久松知子 1991年、三重 —
Tomoko Hisamatsu 1991, Mie —

東北芸術工科大学大学院修士課程芸術文化専攻日本画領域修了。2011年より三瀬夏之介らが主導する「東北画は可能か？」に参加。日本近代美術史や日本の美術界、日本のローカルな文化を題材とした独自の視点と批評性による絵画を制作、高い評価を得ている。2020年、アートを買うことの敷居の高さに挑戦する「300円絵画」プロジェクトを開始した。

■深堀隆介 1973年、愛知 —
Riusuke Fukahori 1973, Aichi —

愛知県立芸術大学美術学部メディアデザイン専攻学科卒業。ディスプレイ会社で勤務した後、本格的に創作活動を開始。「2.5Dペインティング」と称される、枡などの容器に透明な樹脂を流し入れ、アクリル絵具で描画するという工程を繰り返す独特の手法で立体的に見える金魚を描いた作品で評価される。その他、立体造形、絵画等も制作。

■マコトフジムラ 1960年、ボストン(アメリカ) —
Makoto Fujimura 1960, Boston (U.S.) —

1986-1992年、文部省奨学金留学生として東京藝術大学および同大学大学院に在籍。稗田一穂、加山又造らに日本画を学ぶ。日本画、現代美術といったカテゴリーに留まらない芸術をめざす。国際的な実績と同時多発テロ事件の影響を受けた作家たちを支える活動(トライベッカ・テンポラリー)により、2003-2009年、米ホワイトハウス文化担当顧問に任命される。ニューヨークを拠点として多岐にわたる活動を行っている。

■山本太郎 1974年、熊本 —
Taro Yamamoto 1974, Kumamoto —

京都造形芸術大学卒業。現在、秋田公立美術大学准教授。学生時代に寺社仏閣とファストフード店が混在する京都にインスピレーションを受け、伝統と現代、異質な文化が同居する「ニッポン画」を提唱。国内外の美術展に参加し、その作風は現代の琳派とも評される。近年は、被災地をはじめとする日本各地の地域に根差したプロジェクトを行うなど活躍の幅を広げている。

■山本 基 1966年、広島 ー

Motoi Yamamoto 1966, Hiroshima ー

金沢美術工芸大学卒業。現在、金沢市在住。早世した妹や妻への追想、離別、記憶の忘却への応答として、浄化や清めを喚起する塩を用いて、床に模様を描くインスタレーションを制作。展覧会最終日には、作品で使用した塩を鑑賞者とともに集め、それを海に還すというパフォーマンスを行っている。アクリル絵具や岩絵具を用いて緻密に描かれた平面作品や屏風も手掛ける。

■吉澤舞子 1987年、千葉 ー

Maiko Yoshizawa 1987, Chiba ー

多摩美術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画研究領域修了。「希望のつくり方」をテーマに置き、画面に物語性を持って岩絵具やアクリル絵具を用いて作品を制作。人の身体や器官をモチーフとし、様々なものにメタモルフォーゼしていく様子を描くことで、身体、精神の可能性を表現している。パフォーマンスや舞台の出演者の身体に絵を描くボディペインターとしても活動。

■李禹煥 1936年、慶尚南道(大韓民国) ー

Lee Ufan 1936, Gyeongsangnam-do, Korea ー

1956年に来日、日本大学文学部で哲学を学ぶ。1960年代末、戦後日本美術における重要な動向「もの派」を、制作と理論の両面で牽引した。1970年代初頭からは画面の一部に筆を入れ、余白を残すことにより空間の存在を感じさせる「線より」「点より」シリーズを発表。1980年代には、よりダイナミックに空間を意識した「風より」「風と共に」シリーズを制作。美術批評も手掛ける。多摩美術大学名誉教授。